

# ナミビア共和国

## 【国名】

- 世界最古の砂漠の一つといわれるナミブ砂漠に由来します。「ナミブ」とは、先住民の言葉で「なにもない」との意味であり、1968年国際連合が南西アフリカの独立支援のため与えた国名です。90年に独立し、独立の日は国連の「国連反アパルトヘイト（人種隔離）デー」にちなんで3月21日としました。

## 【国旗】

- 太陽は生命とエネルギーを象徴し、その黄金色は平原とナミブ砂漠を表しています。左肩の青色はナミビアの空と大西洋とその恵みを、赤い帯はナミビア人独立の闘争で流された血と犠牲を、右下の緑は植物と農業資源を意味します。そして赤の帯を縁取りする白は平和と統一の象徴です。独立時、国旗のデザインが公募され、835の案の中から採用されました。



## 【国土】

- 南半球に位置しているナミビアは、全体的には亜熱帯気候に属しており、面積は約82.4万km<sup>2</sup>（日本の約2.2倍）です。首都のウィントフックの位置する中央部は、標高1650mの高原のため比較的しのぎやすく、雨期（11月頃～4月頃）と乾期（5月頃～10月頃）に分かれています。一般的に乾燥した気候となっています。昼夜の気温差が大きく、乾期の朝晩には0～10度となります。ナミビアには、さまざまな民族が暮らしており、人口は約303万人で人口密度は約3人／km<sup>2</sup>と世界で最も人口密度が低い国のひとつです。



- ナミビア北東部の、東に細長く突出した領土はカプリビ回廊と呼ばれます。同回廊は、ナミビア（当時は南西アフリカ）を領有していたドイツ帝国が、回廊を流れるザンベジ川を獲得して、同様にドイツの植民地であったタンガニーカ（タンザニアの大陸部）が面するインド洋への大陸横断路を確保するため、1890年に英国と領土交換を行って南西アフリカに編入した土地で、当時のドイツ宰相レオ・フォン・カプリビにちなんで名付けられました。しかし、領土交渉後に、ザンベジ川は中流にヴィクトリアの滝があるためにインド洋までの通航が不可能であることが判明しました。

## 【ナミビアの世界遺産】

- ナミビアには、ナミブ砂漠とトゥウェイフルフォンテンという2つの世界遺産があります。
- 大西洋岸にあり、世界最古の砂漠のひとつと言われているナミブ砂漠は、2013年、世界自然遺産に登録されました。23,000 km<sup>2</sup>の

広さを誇るナミブ・ナウクルフト国立公園は、砂丘を保護するために作られたナミビア最大の自然保護区であり、世界第4位の規模を誇っています。

- 広大なナミブ砂漠の中でも最奥部のソーサスフレイは、アプリコット色の赤い砂が有名であり、高さ300mの世界最大の砂丘群を抱えています。特に、公園入口から45kmのところにある「デューン(DUNE)45」は、美しい写真が撮れる場所として有名です。
- 2012年12月、紅白歌合戦において、特別出演歌手のMISIA（第5回アフリカ開発会議(TICAD V)及びTICAD 7名誉大使）が、ナミブ砂漠から中継で登場し熱唱しました。



ナミブ砂漠



デューン 45

- 北西部にあり、2,000年以上前のものとされる岩刻画群から成るトゥウェイフルフォンテンは、2007年に世界文化遺産に登録されました。岩刻画はこれまで2,000以上が発見されており、狩猟の様子や動物などが描写されています。



動物を描いた岩刻画

## 【砂漠の植物】

- ウェルウィッチア（学名：Welwitschia mirabilis、和名「奇想天外」）は、葉の基部に成長点があり伸び続け、先端部から枯れていきます。根は10m以上伸び地下水を汲み上げ、葉から水分を蒸発させ冷却することで砂漠の暑さに耐えて1000年以上生きると言われています。ナミブ砂漠でしか見られない絶滅危惧種。生存・不屈の精神をあらわすとして、ナミビア国の国章にも描かれています。



## 【フィッシュ・リバーキャニオン】

- ナミビアの南部に位置し、アメリカのグランド・キャニオンに次いで世界第2の規模を誇る大渓谷です。最大幅は27km、深さは550m、距離は160kmに及びます。

## 【エトーシャ国立公園】

- アフリカ最大級の塩湖であるエトーシャ塩湖（千葉県や愛知県とほぼ同じ面積で、塩度は海水の2倍）を囲んだ国立公園です。雨期にはアンゴラ国境付近から雨水が流れ込み、象やライオンなど大型野生動物が多く集まるアフリカ屈指の野生の王国です。



エトーシャ国立公園の野生動物

## 【ウォルビスベイ】

- ナミビア最大の港であり、入り江にはフラミンゴを含む多数の鳥類が訪れることで有名です。1990年の独立後も引き続き南アが実効支配していましたが、ナミビア政府の再三に亘る返還要求後、1994年にナミビアに返還されました。現在ナミビア政府が国家開発計画で進めている南部アフリカ開発共同体（SADC）における国際物流ハブ化構想において、物資のゲートウェイとなる最重要拠点となっています。



ウォルビスベイ港の様子

## 【スワコプムント】

- 大西洋に面し、ナミブ砂漠の端に位置し、ナミビアで4番目に人口の多い都市。人気のビーチリゾートであり、19世紀のドイツ植民地時代の建築が特徴。1892年にドイツ領南西アフリカの主要港として設立されました。

## 【ケープ・クロス】

- ナミビアの中都市、スワコップムントの115km北に位置するオットセイの生息地です。何万頭もが海岸で密集したり、波間に漂う姿は壮観です。ヨーロッパ人が初めてナミビアの海岸に到着し、石の十字架をたてたことが地名の由来となっています。



無数に集まるオットセイ

## 【リューデリッツ】

- 大西洋沿岸の港町で、ダイヤモンド産出に関わり栄枯盛衰したドイツ人入植地の廃墟（ゴーストタウン）が観光名所となっています。また、町の南部地域は、ダイヤモンド採掘のため、一般人は立ち入り禁止地区となっています。



廃墟の様子

## 【スポーツ】

- 人気のあるスポーツはサッカー、ラグビー、クリケットで、特にサッカーが一番人気です。なお、ラグビー・ワールドカップ 2019

日本大会にはナミビア代表チームが出場しました。チームの愛称は、Welwitschias(ウェルウィッチアーズ)であり、ナミブ砂漠植物に由来しています。

- 2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピック 2020には、ナミビアから計14名の選手が出場しました。オリンピックでは女子200メートルでクリスティン・ムボマ選手が銀メダルを、パラリンピックでは男子400メートルでアナニアス・シコンゴ選手が銀メダル、ジョハネス・ナンバラ選手が銅メダルを獲得しました。

## 【ヒンバ族】

- 北部オプウォという町の周辺で暮らす遊牧民です。日差しや虫から肌を守るために、バターと赤い粘土を混ぜた「アラミ」というものを髪や体に塗っており、全身赤茶色になっています。衣服は、腰から牛革で

きた前垂れのみを着けており、上半身は裸で生活しています。



## 【食事】

- かつてドイツの植民地だったこともあり、ソーセージ類が充実しています。主食はトウモロコシやヒエの粉をゆでて調理したパップです。独系ビール（Windhoek Lager など）も美味しいです。また、野生動物も多く生息していることからシマウマやオリックスなどのゲームミートも楽しむことができ、大西洋に面し豊富な漁場を有しているため生牡蠣などの新鮮な海鮮も堪能できます。



パップ（右側）



カパナ（ナミビアのストリートフードの一つ）

## 【漁業】

- ナミビアの沿岸は良い漁場となっており、日本との関係ではお正月の「おせち料理」や祝い膳に欠かせない伊勢エビは日本に多く輸入されています。

## 【鉱物資源】

- ナミビアは、ダイヤモンド、銅、金、亜鉛、ウラン、レアメタルなどの鉱物資源に恵まれ、鉱業が漁業や農業と並ぶ主要産業となっています。

- ナミビアはダイヤモンドの産地として有名ですが、その95%が海から採掘されています。それは、南アフリカ内陸部高地のキンバーライトと呼ばれるダイヤモンド鉱床が風化作用を受け、固いダイヤモンドが数千万年にわたって、川により大西洋に運ばれ、その後、海流によって海岸沿いに北部に移動し、ナミビアの浅い海底に堆積されたためです。長い年月を経て沿岸地域で発見されるダイヤモンドは、美しく輝く宝石として世界中の人々を魅了しています。
- ナミビアは、原子力発電で重要な役割を果たすウランの生産国としても知られています。生産量では、カザフスタン、カナダに次いでナミビアは世界第3位の産出国となっています。

## 【石油・ガス】

- 2022年にオレンジ堆積盆地沖合で豊富な埋蔵量を有する石油・ガス田が新たに発見され、2029年には石油事業の操業が開始される見込みとなっています。

### 【グリーン水素プロジェクト】

- ナミビアは世界有数の太陽光・風力資源を有しており、グリーン水素とグリーンアンモニアの生産において長期的な競争優位性を有しています。ナミビア政府は、EU、ドイツ、ベルギー、オランダとの協力の下、スワコプムント及びリューデリッツでグリーン水素プロジェクトを実施しています。

### 【対ナミビア経済協力】

- 日本は、1990年のナミビアの独立以来、247億円規模の経済協力を実施。具体的には、持続的かつ包摂的な経済・社会発展の実現に向けた支援のため、産業基盤強化、農業開

発による貧困削減・生計向上を主要な柱として様々な支援を行ってきました。天然の良港（ウォルビスベイ港）や、周辺諸国へ通じる国際回廊を有する好立地を生かした物流立国への支援や、小規模農業従事者である低所得層が多く居住する北部地域における農業開発支援は、ナミビア政府や農業従事者から高く評価され、感謝されてきました。また、持続的成長に不可欠な人材育成のため、様々な分野において各種研修等の技術協力も実施しています。

- ナミビアの将来を担う人材を育成することは重要な経済協力のひとつです。高等教育における最近の取組として、JICA から、就業率向上のための産業人材育成アドバイザーをナミビア科学技術大学へ派遣しています。小型トラック模型の組立て演習を通じて計画実施やカイゼン、想像力、チームワークなど組織の中で職務遂行に必要な就業

スキルの習得を目指すというユニークな取組がナミビア政府からも注目されています。

- 効果的な人材育成のためには、初等教育から取り組みを始めることが重要です。JICAは2006年以來、累計で173名以上の海外協力隊員を教育分野を中心に派遣してきました。ナミビアでは教室不足も深刻であるため（約4,000教室が不足）、日本は1997年以來、これまでに80校近くの小中学校において新規教室等の建設を実施してきました。



両国国旗が描かれた新校舎